

環海異聞

卷之四

四



k 44

富士文庫



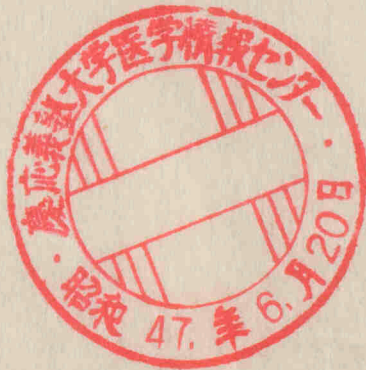
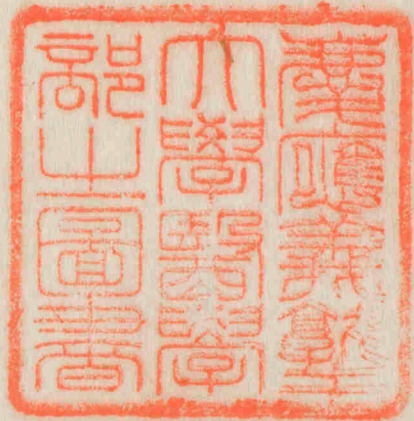
290.9

Ka

4

290.9
K

No. 2519
12 K 44



富士川文庫

167

所本
三又

環海異聞卷之四

飲食第二

食事ハ日一三反用巾胡は小麦の蒸餅を
食ひて桑を飲む事なり是は古来日中乃
はとめの儀むと定規に食す寸米ハ五時
なりけ二反ハ本式なり 稗麦の蒸餅と牛
肉の煮つるを中用

一 麦餅をクレブといふ 長崎の麦餅はこれ

た食す。て稗麦の粉を蒸焼す。た。よ。え

麦の粉の新法なる事をいふ。不磨といふ

をりす。り。イルコーツ。辺。より。名。新。磨。石。

の道中。よ。そ。ハ。風。扇。を。用。て。攪。拌。す。といふ。

ヤサクルマ

一 ケレブ 蘇の製法の定法のとく。麦れ粉をある

和。練。り。捏。して。餅。と。れ。一。蒸。や。き。す。る。

よ。え。そ。中。焼。す。り。捏。か。あ。た。る。よ。の。二。三。で

残。一。筋。へ。至。目。成。練。り。味。ひ。受。す。を。ま。ち。て。あ

か。や。き。り。か。一。食。ひ。試。む。る。稍。酸。味。を。生

ず。れ。り。け。す。も。の。も。あ。る。物。を。以。て。は。ま。に。製。す

る。の。た。ま。を。す。お。ケ。レ。ブ。を。は。く。ら。ん。と。す。る。よ。の。麦

の。粉。何。升。を。ぬ。る。と。湯。を。一。交。せ。あ。ま。せ。そ。の。内

古。の。酸。味。を。ま。し。う。る。餅。場。を。細。く。碎。き。て。是

と。和。一。か。き。上。一。粉。せ。至。る。時。別。の。定。限。有。て

ま。き。立。れ。り。又。う。れ。を。う。く。う。き。ま。す。と。い。ふ。

ふよ水と砂とを増しかしを箱に埋め
燐とあるの皮を剥きえ切られをとり燐塊モチ
作り人よりおまうせやすれり其又土塊を竈
の内はあゝあやけらるゝの之並へ蒸焼
する人灶カマドの下はいゝゝ竈の内ハ下地へ
磚カキラを敷きろゝ作りたるもの之を内へ薪を
焚きたつゝるれば居熱火となりてあり其内に
あまたき落しの火をいそゝなりかぬ事乃

附する松の枝木を断ち第とれ——たるまの
水とそくもく——そ熱気のこをまれの掃除を
れ——そまのけいれとあく——熱やまのするまの
あまり熱氣強けれの暖のよまくり焦れて火
氣の内は透るけす細毒孔多くなちを火きく
ぬくぬきを依く——そ火か減を減むるまの
掃除したる馬のこへ物をとりひくる火氣はこ
れぬ粉やちく——そえあつるこけけられぬ合せ

只そ粉乃をけくあつきたるけはそ厚
くは解きぬれぬく蒸やまあはあくるく
あまくるあは腰皮の皮のくくは解きぬれぬ
程を考へ一ちふり用ゆきを一皮は製し
ずうけお細夕の食料として用ゆ時小力
薄くそきく食ふそそきかこは切者不切者有
初は薄く不厚くあるやうは切を宜しとす
はるれくるものゝ^{タカヒク}厚^{アウ}薄^{ウス}あまくるくえ苦く

きれり

小麦のケレブはこれと製法お違せりま川袋は
あまを金小麦の粉をその内は扱し^{かき}拌せ小麦
酒の染がくかへくくきたて蒸すの内はけく
とけい^お蒸^お細^おはくり^お漏^おり^お又^おこれ^おを^おき^お上^おして
うへは別は粉を増くかへく漏あくるを^おはけ
押おし^おく^お恰^おく^お捏^おし^おら^おく^お程^おは^おれ^おく^お不^お小^お重^おし
改事の場合に作り竈の口熱尾と並べむ

やさしき事―前法のもの―
 ぬけ小麦のガレバ
 ちよき多く食すす
 祭日あるに用ひけおた食
 してハ執^{モクシ}滞してあ―といふ市中の賣物ハ
 平日ともありえッ
 米糶ひひはるかちよえゆ
 一牛肉ハ地方のた食れり
牛の煮名をコロシといふ北
牛をイロコシといふ
 ちよき牛糶―くぬひ
 是市中へ賣物よちあ
 活ふよおつものハ
 五六日よりふ止
 位まで書ひ
 畜者あり
永年此牛の
おとも畜畜
 ちよき―より牛町へ日、率

事りて牛店へ賣渡す
 粗牛をよてこれを屠る
 ちよきある^{ヒサカリ}穢^{ヒタイノウヘ}して
 前項よ向ひ力を極めて
 おツ是
 ちよきあり―とれち
 ちと呪と指^{トク}差―
 穀をれり
 それより皮ハ剥ぎ
 肉をそれよちち
 ちの腸も
 こし―く食料とす
 け肝の孫ハある
 孫をほく
 大小腸ハ肉を卵へ
 ちき返―能く洗ひ清―
ヒヤクヒロ
 ち肉へ塩梅つけする
 挽割の蕎麦をほめき
 祝くよれり
 蒸焼し―小口切ある―
 四ハ

とり宴食の時作りあり
皮の卵は要む蔵人ありて町より解送せ
るれするある持ちきするあー皮は製し
製物とす強くの袋牛皮より製する
もの多しこれ牛皮は活ふるるる皮へ
そめち分ちたる肉ハ店の内はあへて蓋の成立
白身との丸木を店へ蓋受はあへての金
あといはちりり月をわけて賣出する

牛の屠りかゝ目仕別きするものありて
よ入るるものありブラーツケヤコーテ標
ハ豆を細りおき出は喰とて食すとあり

一牛乳と牛乳とあるの食料は和食

これモロコ

といふ按はこれ題破醃酪なり和菓よりホートとよ昂酪
るるへかめさる物とカーはといふ是酪るるへ一たは老食とす
強くして賣出する乳けをとりは先牝牛の
乳は糖をつけあきあきあき後きく家
乳へ退け人々母牛の乳きよきとみ細りか

桶へ満るここれとスーおけかきまゐるこ又乳
汁より油をきる是又料理は油ゆこれとマスに
といふれり

ヤコーテフラーツケハ馬乳をものむす一人は
碎ふよめれりときたりトココは麻の乳
をものむといふ

一カボーシカといふ萩あり 長崎はあきけは地は有る
コウリナといふよこと按ふ
コーシハ和菓萩の萩をいふ 萩菓の一種を長崎よりて蒔きす
常の萩と名をあつゝあはコーリナといふや依祿のボタナ

シヤカタラナ
と思ふはこゝ

これを細く刻み麦粉をかひ拌せ塩を

かへ大樽は仕込並少く酸味を生ずこれ萩の

大ふよりて多ふいあれこれこれを焼く焼く

萩の牛肉はけあうて萩食ふて萩水

二井あれはけ物梳ふて萩わと金かきま

肉を入し萩瓶は金と瓶を竈へ入し蒸した

う萩和す萩汁と肉と併せて麦飯を

添へて食ふれり 豆の食ひ残りあれは萩
又あつめて食ふなり 萩飯は日

本の惣版けおハ味噌汁を候せて食ふと同
根取りけねるゝ根もる誓乃ときよの金目
乃味噌の用は似たり牛肉半人毎日食料
但し根を日ハ牛肉并一切に是の肉をさむ
唯臭るの肉也菜の類より用るなり
人食者ハ常り
食さるゝを以て
猪近潔和といふハ是の肉を禁食するゝ之

魚もハ活きの物とせ寸板魚類ハ煮ても蒸焼

すゝても食ふ禁目あるは魚を小麦の粉よこ

蒸焼すゝて食ふそ長よりけたる粉魚の油にて

ともは耳^{ウマテ}炙るなるれり魚類ハ川魚ハ鮎魚あり

カーモーリヨ^{バイカル}と云湖より漁り来るオモリ^{カド}
似たり

といふ魚ハアルス^{あいなめ}と云魚オモヤラコナ
似たり

といふ大魚の類食料となす皆塩蔵なり乾魚を

も用ゆこれぞヨーカラといふ
物產の類ハ詳す

一 雁鴨の我々の類ハ畜畜て食料とす亦は

畜畜よたへハ百羽あれば百つの雛と育てる
 秋の頃よあれば親を殺して喰う一羽へおき
 冬分精進日等よきふねをまひの雛を
 春分秋よあれば又毛生して其用足りるなり
 百羽ハいつも百羽ありて用と欠さるはとり
 するよの之大家の種々の雛五羽より七羽
 羽も畜ひてありイニヅイカコーレといふ雛を
 もむ上食と云
 按はカラクニテウ
 印雛雛と云ゆ
 これ海家の雛

うれハ畜もす又老人の用ひもせぬなり
 此雛家よりも雛ハ十羽程ハ畜ひて
 蕎麦ハ挽割して用ゆそれ及蕎麦粉も挽
 割してあり粉とたるよのハ粥は炊き
 牛乳油をさして煮食ふ
 麻仁唐松実の油ありけ油ハ精進日よはり
 喰ハ山陰なり味の海陰はさるるなり
 玉門和
 くりりおすといふ

糖

糖ハ牛乳は多を加へ粥はたきく牛乳油を

さ—宴餐の時と馳走の終りはおす小児は

右の—製—砂糖を加へ食はするものあり

米ハ志—げ—南亞墨利加の地方もある

果の—糖米—交易すけ地とて食ふ

夕程—細残百枚程あり

—米^{ライ}荻^シハ細—て旋—風味目や—

留—^ナ生—て—^ナ塩—より麻子油と—糖を日

は用ゆ^{ニシ}荻^シ葡萄ハ煮て食ふ^{ヤブ}荳^ラハ形—く—

あ—生—て食ふ—味の—て耳—

—乾生薑と^{トウ}焼^{カラシ}蕃^ラ椒ハ^{トウ}唐^ラ山—りの交易物なり

け地の人—蕃^ラ椒を好む食ふ解毒の物なり

い—^ラ唐^ラ—やき—か—^ラ唐^ラ—ある

あり—^ラ唐^ラ—も^ラ唐^ラ—の—を用ゆ胡椒も見ゆ

れハ何より—^ラ唐^ラ—ある

一 コーヒと云ふといふものあり其の實れすー ^{フアラマナ} 蠶豆の葉
とのれりムスクに花のうさうさにはまゝ俵へ
て有り市店にて賣物とすまゝに納り粗末に
布袋に入る袋を著へ受け袋の口より熱湯を
流さるゝー 湯は牛乳とさうてのむまゝ鶏卵
砂糖を入るきどーしても飲りあげて却ては
これをのこ振まゐの時客もあす志うーたゝハ
妄りよのまゐむ中等的の人のそ用ゆる

按和菜コーヒーホにといふ別は詳説あり

一 ヤーボルキといふあき芋有り落葉色肌好
芋は似たり

按和菜といふアルド、アツフルあかき種子
を傳へ名 邦にも所生す志うれき果て
ヤーボキるまや吾を志うれ

これをすりいせゝ乾し細末とすものやー
ボルキムツカといふ芋の粉碗一ツ程は小麦粉二杯加

へー製して菓子とあすよあり

土地の風俗もて珍髪へ白粉をすりかゝる

そ新ハ屑けおすり風俗の類は哉

一酒ハあゝ麦^{ムキサケ}醸酒よりあゝて造る地より

あゝあゝあり地ハハラツースケアンケリ等よりあゝ

上酒もあり^{按は葡萄酒なり}ダラヒセイ^酒トて海食を飯

人々悦び樂む店ありそ内には珍玉の名酒種々有

あゝ酒よ^女上^酒ヒナオツカ^酒て再きよの有りてあゝ

用ゆすゝ魚虫を焼ゆ焼へゝそ取換せざる酒を

ニベリといふや

一煙草^{煙草}土地より産す割に煙草ハ産ぶよりきゝる

^{煙草より産すハ}煙草^{煙草}の人多くハ喫煙^{タバコ}せぬ者俗よりと

人ハまれゝ一二吸りなすゝさゝよのむ容子れり

ヤコヒ^{ヤコヒ}フウ^{フウ}ツケ^{ツケ}ハあゝあゝ吸ふて本國の女子ハ

然ゝ喫煙するものれ

一喫煙草といふ物ありこれ煙草を粗末ゝして

箸へ入るおし鼻へさきて咽くこれらも女人ハ用
ひすたましく老婦林甚生のなるかきて涙をたれ
涙をあり——居るものをさる

按るゝ鼻煙のり萬縁は詳す

一 航海^{フナツクリ}をたしする者ハ必ず煙草を薰後す是を
ソニカといふ病を避くる為といふ
ツニガ病のり
別は記す

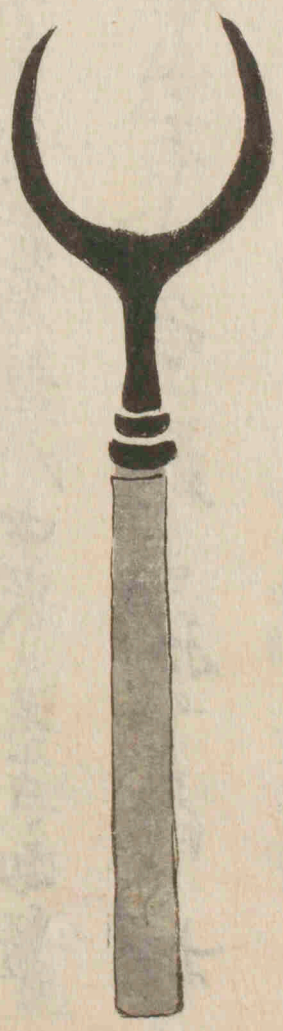
一 食事の仕法ハ娯楽宴集の話を録せる所も
にせる所も平日とても食盤を居へ
取ハ巨角食盤
長角入をさく

いろいろ箸は盛るゝる食物を盤乃中央は盛きお盤
の里り人教後椅子あり名これハ腰をりけ相
纏ふゝ一盤は向ふ盤と強ふれおハ皿を盛く
これ中央の食物をとりて盛り食ふためこは小カ
又食匙のこたき
ありきと盛く是をいづ肉ハカ
すくひ吸ふ 又食法ハ著し酒あれハおぬあすこ
そは海は食盤の上面は白布綿を置く
これ年
秋ハ

又強く白き幅廣のきれを襦へうけ襦とて
 食すすは食お等のあけ内よこられ所をふ
 せくろとえゆ

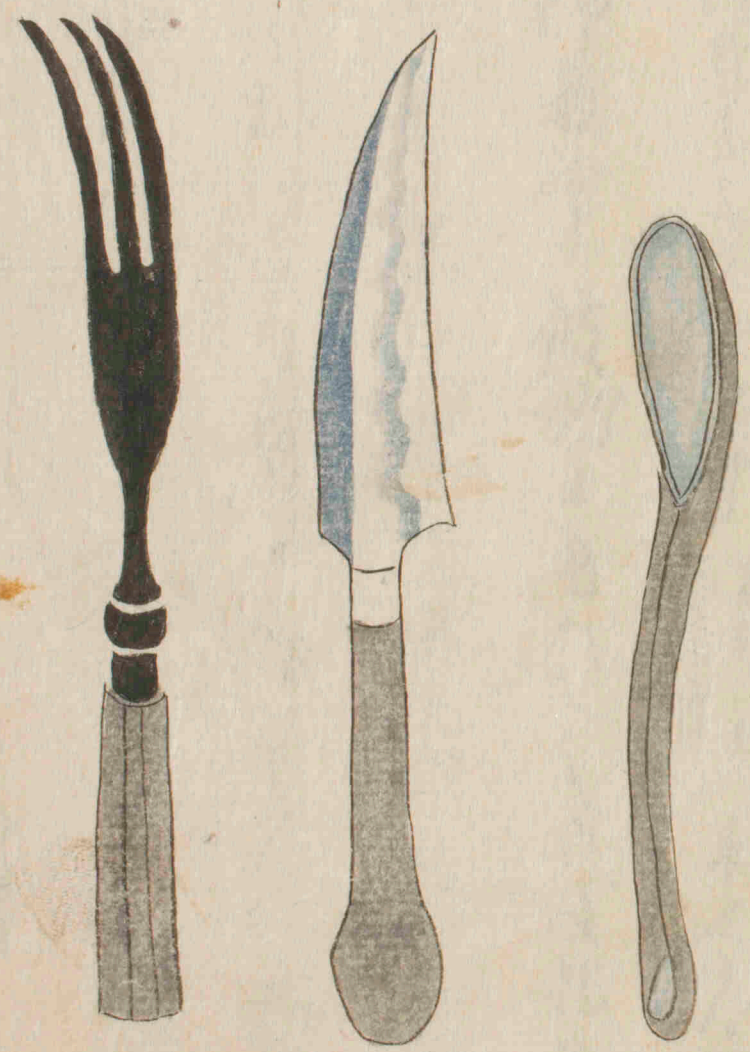


牛肉等入れて
 灶へ火を煮る
 瓶のあ



瓶をのせし電の
 内へお入れする
 鉄器のあ

食盤三ツ道具圖



服飾 第三

衣腕の官爵の尊卑によりて種々なるゆゑと

すゆゑに詳なるを述す

友蔵の類は
大畧を記す

平人衣腕

のお腰客ホ滞毎中彼地は用ひくけ及持糸

―おはし―を束状せるゆたのこさ―其

中彼は又残―おけるも有とてその名のお語

り―も有持あれるものハその用とて状とあ

例傳とする也―を記するものは

トロボカといふ線入のときよの何り皮裏あり毛を
内よりとる上忘れり多量部の細毛はこれを
こウじといふセリトーカ夏用。単衣なり。土
人といふ用もハウーテ上忘ポロケ麻布も
何りてミタノイ 半股川の下へす。 千レケイめり
やま能うして足より膝とめめるそよハキ
といふ物をすくこれハ草すて何りたる襦フすて
襦とすまも也 オルカビツガ 草すて何り 襦フすて
オカハ
手すり

ベリチヤウカ 夏用。手袋 パミマキ 夏用。皮沓

川具皮蒲ナメシカハ多しハ草すり 綿羊皮 肉ハ多拭こ
ヤマニ

毛を入る 鷲鳥雁の毛なり 上果とするもの之略の毛也
便宜美ーブー止をり

根十何枚
和ことと 柳ハ茵のときよのこれす何り蒲葉は同

く形状お何くハ小の差別あると何り 枕蒲葉

は中人以内にお定る多毛を入る但羽茎を除去

去れり皮枕皮蒲葉たは匠者携事れり これを
出後を

強し
あるり 上へとく麻ハ蒲葉ハオミアフといふこれハ

皮ハ用ひず家の也

一 ミラツハ 笠帽よりらんに毛又兎の毛を以て作
カ
型ありてすきたる物の也 紳ハ牛毛を以て

を用ゆは帽亦因並居候の事なれども用ひ暑中ハ

カルトー匹と云ふ 是れハ ポロ カ 淨拭 毛 紳巾之

ミラツハを和菓よりふり止まり セイチカ 故を防く為ニ

冠するもの面形の事とすか 篩の如く作らるる物也

彼地ハ往時程常ニ故多しは物を冠するに

凌ぎかア といふ事ニの巻ニ事あり

オロミイア国昔時の衣被をサラハシといふ田舎

めきしる形なり 五六十歳の婦人今時モ是れ

するものあり中興軍家の先帝武臣の衣被を

今の用るうといふ改革せしと云 襟袖口ありハ

帽子ハ縁部ニありし事はコージキ乃毛皮を

つけし コージキは東北海ニ有海獣之 上寺の人等

ポフロフ「ラツ」にの皮を以て

けだ目巾使長レサノツ止の後を肩布のたき
なるきせもこれきれうて根縁を代りうて
をスウィツタといふ星縁又肩より掛て袖袂裳
のときこのをヒタといふこれ皮紐の記号
皮のきき人ハ皆用るれり赤色と青色と何り
帝王の用る所ハ青色なり即六人のセナツケ
といふ大官の人青色を用ゆる者を用ふるは
帝王とたよ七人のそれり凡そ根縁ハ大抵

同様のようりれども冠は縁す羽毛の色を官
爵のきき分りし也羅紗天衣織の類長高
工並は卑賤の者もた後す綿布ハ却て忌す
とけす是ち地は本縁を産せす綿布を赤縁と
するなりうて綿布の類は多く唐ふり文
易すと尋の人もききの子布を忌後する也
尤毛織の類ハと好の品を用ゆ
兎の皮 兎をハカニ ハカニ 暖りある物なり皮を

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

浅平是皮を脱ぎ合せ
うしろのを粘着する

浅平是皮を脱ぎ合せ
うしろのを粘着する

浅平是皮を脱ぎ合せ
うしろのを粘着する

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ、あま猫ニ
似テ、よ食料トセぬ。

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ、あま猫ニ
似テ、よ食料トセぬ。

肉ハ食リテ、あま猫ニ
似テ、よ食料トセぬ。

彼玉想う
けいふを交

肉ハ食リテ惣々猫ニ
似テると云ハ食料とせぬ

肉ハ食リテ、あま猫ニ
似テ、よ食料トセぬ。

六人ハ笠帽の身ヲた人とおされりこれぞ其
友のまけなりしや冠ハ一面ハ小星はく位は
よりけし星金銀も縁等なり正中にたてる
ものぬきもゆきあるまゝ赤き黒漆分極も
是より凡そ友人のヒタハ減損あるをいふ
ありズウイヅクには扱ひたのきはくけズウ
イヅクハそ位は道ある王より賜ふを月ゆるあり
又夢ひ求め用るもあり友對よりてズウイヅク

をくりする人ありヒタしをくり用る人ありね位
卑くても王の牙ちうく勅る人あり位くても
たゞ位待る人あり

口友外友の
差別あり

帰帆の希何れもレサノツ止の鼓へ健きし友人
夥く暇をよするをよしこれズウイヅクの後
を忌たり位級人あるへ

レサノツ止長崎津波破るへか一時月ひーズウイヅク
の新後肩よりけしをヒタも玉より賜ふ新

解りときたり

衣履の製法をきくゝあるるゝあるるゝ
漂客おえりゝゝあるるゝ十分の二あるゝ
お解れるゝの荒堀ちのゝゝあるるゝ

漂客帯束冠帽衣履諸号

カリトース

草帽子 道中専コレヲ用ユ

後

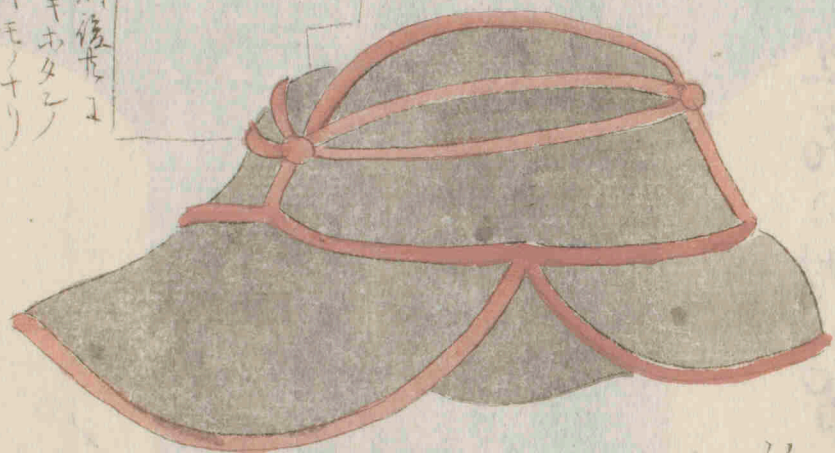
ハチノ裏カバ色ノフスヘ草也

トエノトモ草ニテツクル

竹筋紅草
縄ヲ赤黒
色ノモミ
茎ナリ

タム時此所
同月入

前後
黒キホタテ
加キモナリ



前

解りとさきなり

衣類の製法

源家

お

の

あうそ十の二るへ

源家
お
の



後

いそぐせとあふれん掛あ

いそぐせとあふれん掛あ

源家節末冠帽後板

源家

源家

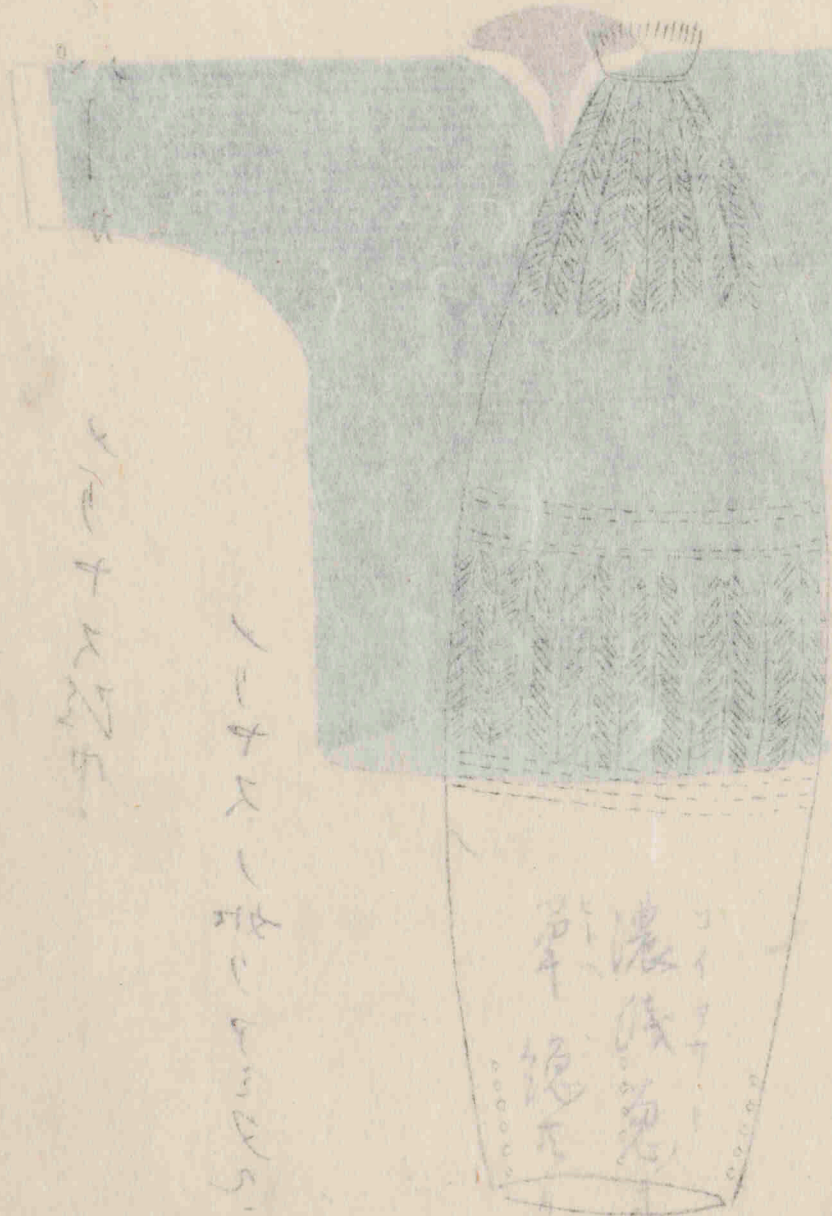
源家

源家

源家

源家

源家



カリパーカ

メリヤス羽巾

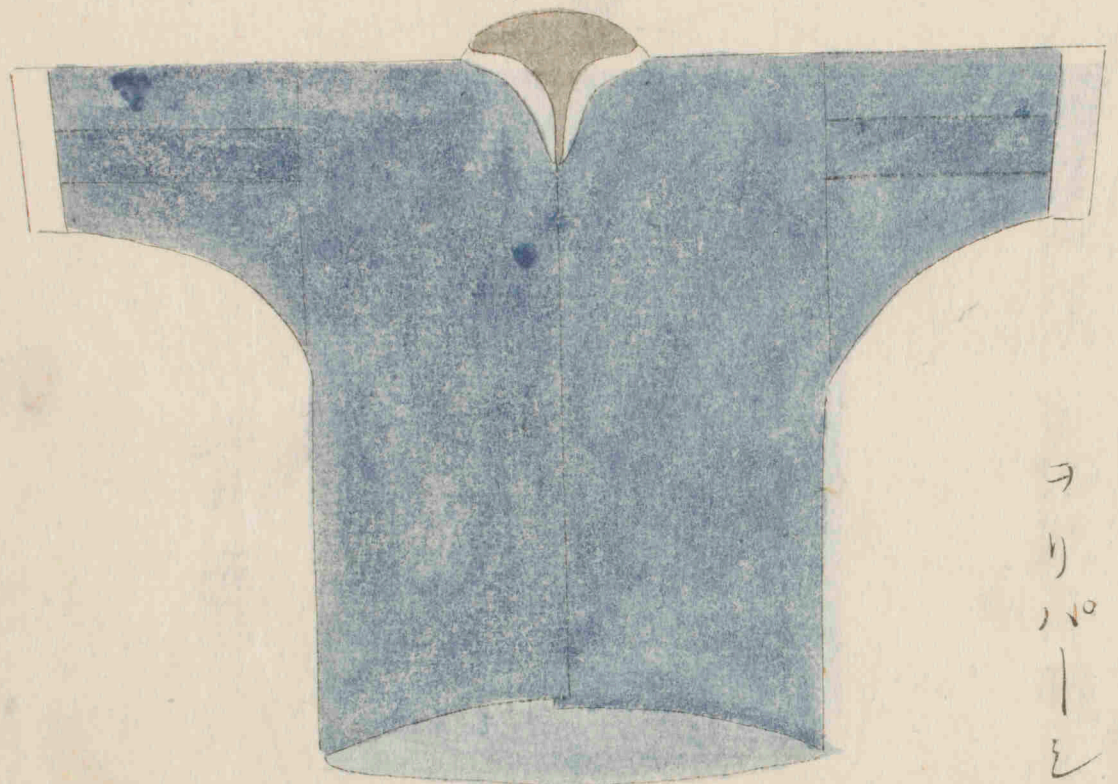
メリヤスノ如クアミタニモノナリ



レヲリメヨリ内へ折返テカニ

ハ帽子主名の付ハ男也ス家々居ル内ハ男

梅ノ和蘭ハスラーゴニユフトイフ
睡帽ノ如キナリ

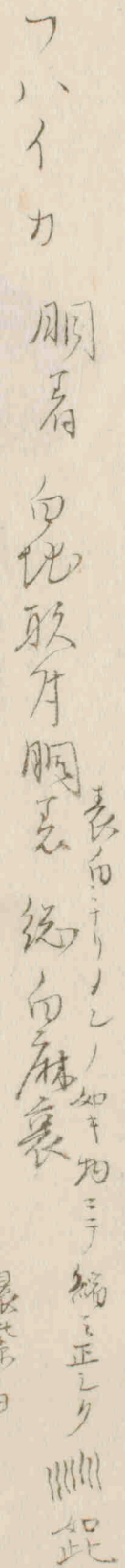


ヲリパーシカ

肌ハ滑けてスル綿也
麻也とも似ル

コイヤサキ
濃儀葱色綿也
平綿也

[Faint handwritten notes, possibly bleed-through from the reverse side.]



白
白

紫
紫
飲アリ
淡紫

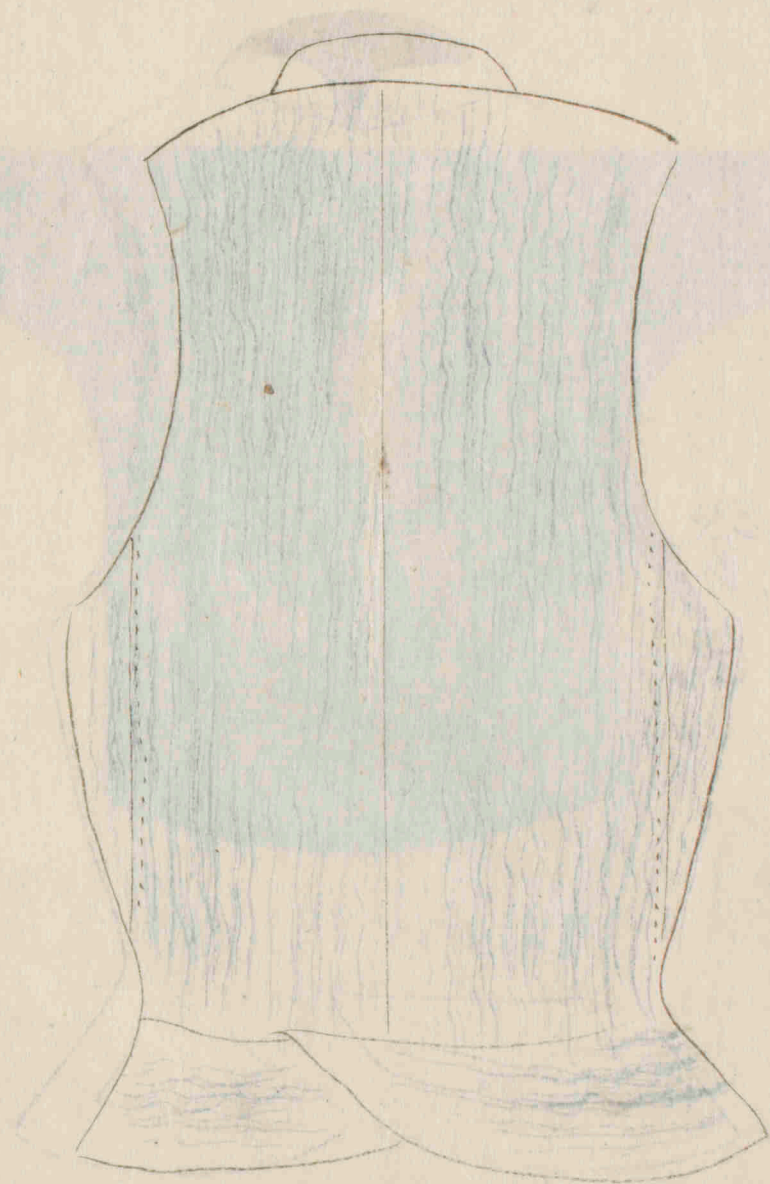




シ胤名「草」

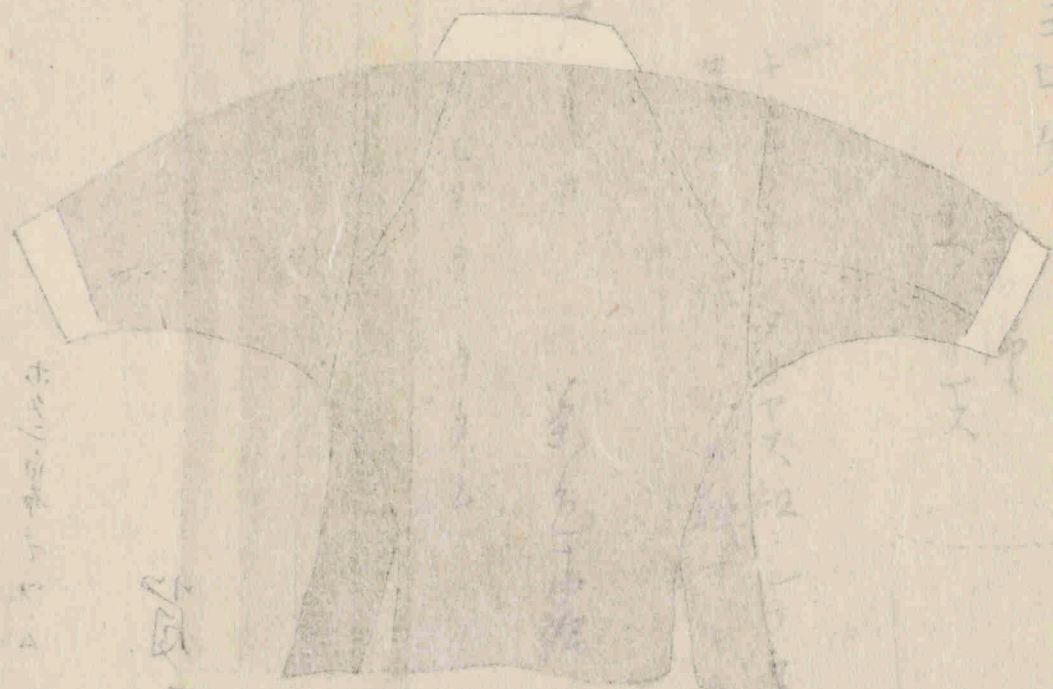
カミツ

少綿綱島



Handwritten notes in Japanese, including the characters 'シ胤' and '草', and other illegible text.

十ヨロケ



ナメシヨロケ

ヨロケ

ヨロケ

ナメシ

田舎ノゼリトクヲモタリ
エウエノホリ

面ハシカサ

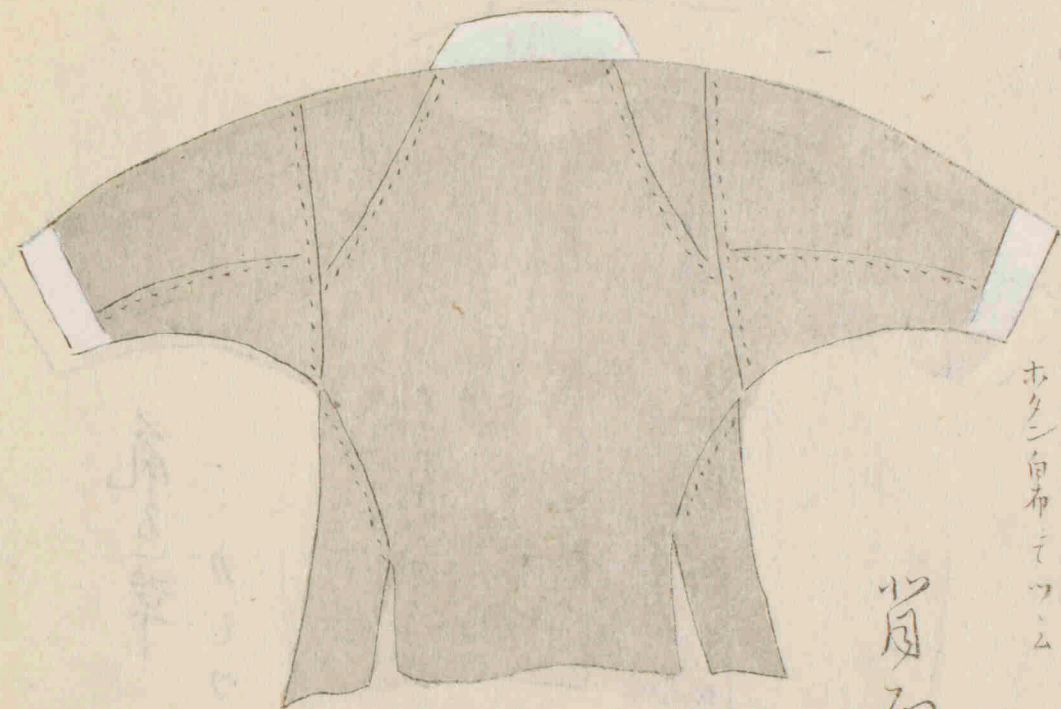
ナメシ



ナメシヨロケ

ナメシ

ナメシ



ホタテ白布にてツム

背面

千ヨロケ

白布綿
足ノメリヤス



ナゴルケイ メリヤス組ミシテ足ヨリ膝までハメルモノナリ其上ニハ
草ノて作りタル 轆サハキトイフモノヲハノル

シヤーカ

糸色小綿サ

田舎ミセリトクヲタタル
上ラシメルナリ

ヒダヲトリタム



面ハシ加ササリ
アリ

アサ共一丈
一尺寸五分

ホリニギハヤヒ

前田

トクササキ
ササキ

トクササキ
ササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ



トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ



トクササキ

トクササキ

トクササキ

トクササキ

ホロケニツサ

白麻手拭

モノニカケガキテ手ヲフクセ

ホロケイサ

長七尺
大分
幅二尺
等



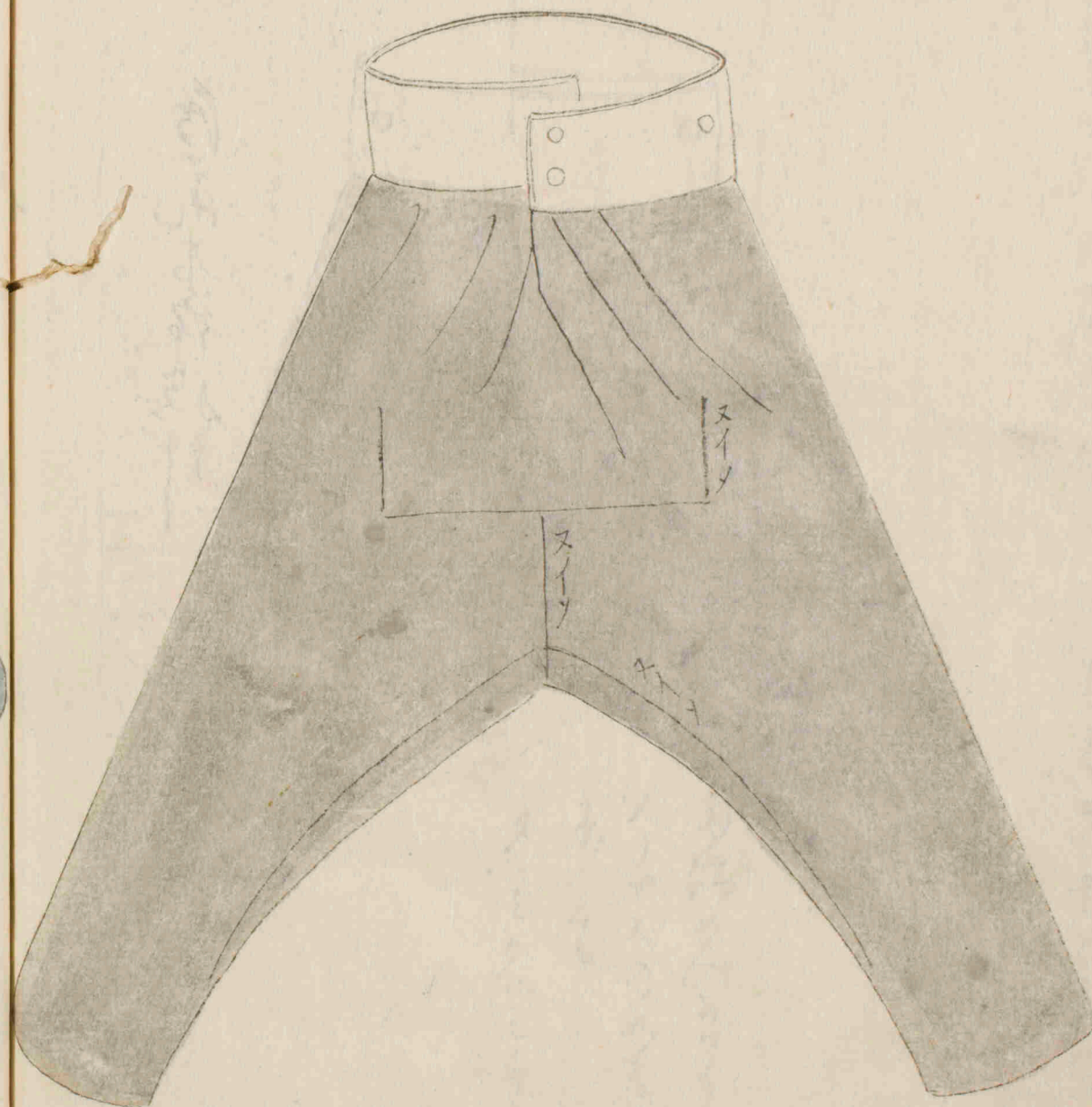
あはれめ
ノリヤスのみき
糸にて
タミタルモノナリ

シタノイ

唐嵐巾錦紋



月



ヲ
ナ
セ
ア
ヲ

サ
ラ
サ
二
浦
田



中
島
ノ
毛
ノ
如
キ
毛
ノ
ヲ
入

此
紋
白

環海異聞卷之四終

附三

月
十
二
日
申
時

